

ライフストーリーワーク

子どもが生き立ちを受け入れるため

- 1 里親開拓「愛の手運動」とは
- 2 ライフストーリーワークに関心をもったきっかけ
過去の空白をうめようとする子ども達の出会い、子どもは何を求めているか、
- 3 欧米に学ぶライフストーリーワーク

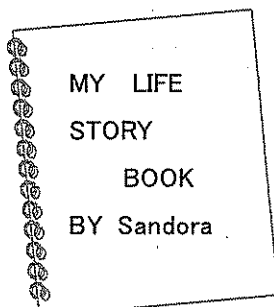
欧米では、里親、養子、施設など児童福祉の保護のもとにある子どもに、生き立ちの記録「ライフストーリーブック」づくりが提唱されています。子どもたちが幼い頃のことを理解する手助けをすることが、子どもたちが現在や未来を前向きに受け入れ、生きていくうえで最良の方法だという理解が深まったからです。ライフストーリーブックを作る事も含め、かかわる作業をいいます。

子どもの過去は子どもの人生の一部

子ども時代を生みの親と一緒に過ごしてきた子ども達は自分の過去をいろんな方法で手にいれることができます。しかし、親から離れて暮らす子ども達はそういうわけにはいかず、しばしば失われたり、忘れさられたりします。ライフストーリーブックを考案したベラ・ファールバーグは「すべての人々は自分の生き立ちを知る権利がある」と言い、ライフストーリーワークでは、子ども達に「あなたが大事な、あなたの考えと気持ちが大切な」とメッセージを伝えることが必要なことです。

ライフストーリーブックとは

絵や言葉、写真や手紙、出来事で作る子どもの生き立ちの記録。信頼できる大人に手伝ってもらい、子ども自身が作っていくというもの。



トレーシーという女の子についてのお話です。彼女は子どもの施設で暮らしており、自分のライフストーリーを書いています。彼女の夢は里親のもとで本当の家庭を見つけ出すことです。それがどうにか実現します。

「おとぎばなしはだいきらい」

ジャンクリーン・ウイルソン作

偕成社刊 1200円



ライフストーリーブックの内容

出生の記録、その後の健康、病気など発育過程の出来事
その子のしぐさやエピソード・お気に入りの遊び、おもちゃ
その子にとって重要な人々のこと
現在の家族、学校、友達、好きなこと、嫌いなこと
どのように里親や施設に預けられるようになったか等
実親からのメッセージ、元の家族の長所、短所

とりかかるにあたって

記述は肯定的に。無理をしない
生みの家族やどうして保護が必要になったかは肯定的な面を強調
ウソの情報をさけ、格好をつけない
子どもの話に耳をよく傾け、子どもの信頼を裏切らない
話すということは癒すという効果があるということを知る

作ることで、子どもは何を得るか

自分自身について筋道をたてて話す方法を学ぶ
自尊心をたかめる機会
生き立ちを人と共有する
離別の問題を明らかにし、解決する機会
現実離れした思いこみを修正する機会
過去、現在、未来のつながりを認識
愛着形成を促す
過去の出来事の整理

4 里親におけるライフストーリーワーク

日本社会の状況やおかれた環境のなかで、生き立ちを受け入れていくための
ライフストーリーワークに何が望まれるか。

- ・ 里親や養親家庭での真実告知がなされることが前提
- ・ 育つ過程での出来事やエピソードを大切にす。
- ・ 生き立ちを受け入れるためには離別の悲しみや怒りもあることを受け入れる。
- ・ 取り組むあたって